



三六災時の四徳地区(昭和36年)



三六災前の四徳地区(昭和34年)



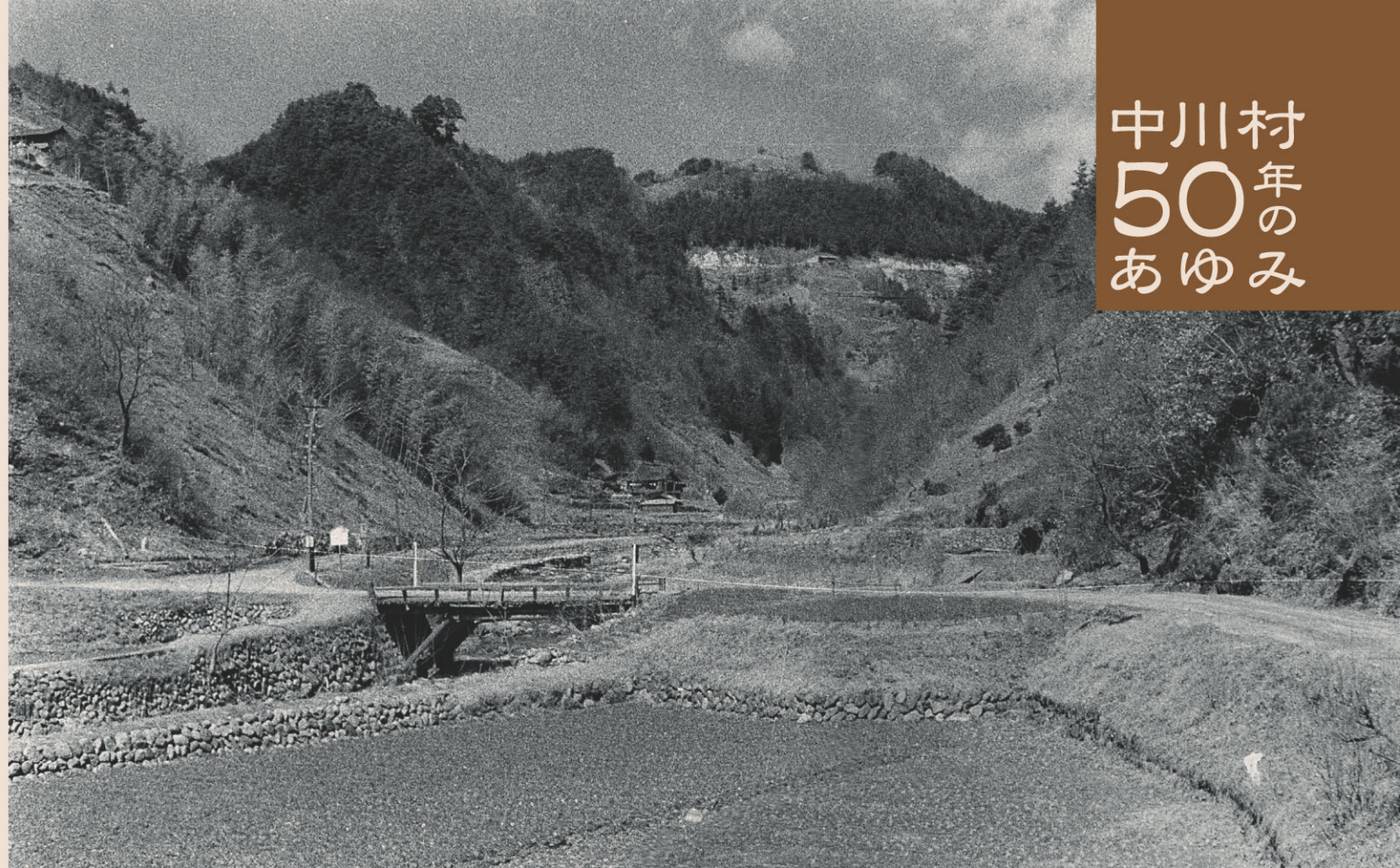
東公民館バレー祭(昭和39年)



天の中川橋渡り初め(昭和35年)



米の検査・片桐農協米倉庫前(昭和30年代)



桑原の小波川付近(昭和31年)



南向村・片桐村合併調印式(昭和33年)

## 明治から合併までの中川村

中川村は昭和33(1958)年3月31日、新市町村建設促進法により南向村と片桐村が合併し、同年8月1日より新村として歩み出した。

前身の旧南向村は、明治当初は大草村、四徳村、葛島村かつしまに分かれ、葛島村は天竜川を隔て片桐郷七カ村に属していた。明治8(1873)年、この三カ村が合併して南向村となり、明治14年に再び三カ村に分離したが、明治18年に大草村外二カ村となり連合役場を置き、明治22年三カ村は再合併して南向村となった。その後昭和24年に日曾利集落が分離して飯島村(当時)に行政変更した。

旧片桐村は明治当初は田島村、前沢村、小平村に分かれ、さらに葛島村、七久保村、上片桐村、片桐町の四町村が加わった七カ村で片桐郷をつくっていた。明治8年、葛島村は分離して南向村になり、残る六カ村は合併して片桐村になった。しかし明治14年には分村して上片桐村、片桐村、七久保村となった。明治18年に片桐村外二カ村となり連合役場を置いたが、明治22年に再び分村した。片桐村はその後、新村誕生の昭和33年まで続いた。

### 歴史余話

初めて経験した  
自然災害の恐ろしさ



小池嘉雄さん【美里】

### 昭和30年代 1958~1964

#### 新村誕生と三六災

昭和33(1958)年8月1日、南向村と片桐村が合併し、中川村が発足した。村名は、天竜川を仲立ちに結束する新しい村にふさわしい名称として、新村名公募で決められた。発足時の人口は8433人であった。

「新村建設計画」に基づき新しい村づくりが始動し、翌昭和34年には「中」の字を意匠した現在の村章が制定された。しかしその2年後、誕生間もない村にとって、過酷な試験が待ち構えていた。伊那谷を襲った昭和36年の梅雨前線豪雨、いわゆる三六災さんぷくさいである。

この年の6月、24日から降り続いた雨は27(28)日にかけて523ミリを記録した。村内の川という川、沢という沢が氾濫。山崩れなどにより村内の犠牲者は18人、負傷者8人、流失家屋などの被害314戸、農業被害額1億930万円、土木被害額15億円余、林業被害額50億円余で、全村の耕地面積の36%が流失するという大被害をもたらした。

この災害で特記すべきことは、700余年の歴史をもつ四徳地区が全戸移住となり、無人の谷となったことだろう。昭和37年6月には四徳の全87戸及び桑原12戸の集団移住が決定。災害による移住世帯数は総計で156戸に及んだ。

村では新村建設計画をいったん見送り、災害救助法の適用を受けて災害復旧に全力をあげた。一連の復旧事業が完了するのは3年半後の昭和39年11月である。

### 三六 六災は生まれて初めて経験した、生涯最大の自然災害です。

当時私は31歳で、家は養蚕をやっていた。春蚕の上簇が終わったころでした。田の水を見に行ったら、降り続いた雨で和見沢川の水量が増えており、晩経ばんけいで朝起きたら田んぼは水浸しになっていました。そのうちに谷田の家が2軒流されたとの連絡が入り、さっそく救援に向かいました。また黒牛では一人が土砂で埋まりました。二人は流され、共に遺体で見えませんでした。うちは川より上方だったので、近所の人たちが避難してきました。この辺一帯も田は泥が入って埋没し、道は寸断され、二十世紀梨の果樹園も全滅とひどい状況でした。

復旧工事が始まると女衆も土方仕事に出て、人海戦術で作業に当たりました。「こんなところはおれん。出て行かないや」と言う人もあったが、幸いここ(美里)では出ていく人はいなかった。

斜面が崩落するのを初めて見た時は、心底恐ろしかった。一瞬のうちに70~80メートル落ちるんです。この辺はそれまで大きな災害はなかったし、水害は天竜川の端のことだと思っていたので、自然災害の本当の怖さを知らなかったのです。後にも先にも三六災でその恐ろしさを経験しました。(談)